開催地名：愛知県南知多町	
開催日時	令和５年１月 27 日（金）　10：00　～　11：45
開催場所	南知多町役場
語り部	伊藤　正治　　（岩手県大槌町）
参加者	町長含め幹部職員、職員　50 名
開催経緯	当町は愛知県内で３自治体しかない南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域として指定されている。被害予測（愛知県東海地震・東南海地震・南海地震等被害予測調査結果（H26.　５県公表））では、町民の１割以上の死者が出るなど甚大な被害が見込まれている。 一方、幸いにも近年災害（特に地震・津波）による大きな被害が起こっていないため、災害対応経験のある職員が少なく、事前の準備が十分なされているか、的確に災害時対応が行えるかなどの点について懸念している。
内容	（１）大槌町の被害について 大槌町はリアス式である三陸海岸のほぼ中央に位置し、古くから豊かな海の資源に恵まれ、水産業で生計を立ててきた歴史がある。震災前の人口は 15,994 人であったが、現在の人口は 11,018 人となっており、30 パーセント以上の約 5,000 人が減ってしまった。 平成 23 年３月 11 日の午後２時 46 分に発生した地震により、大槌町では津波が発生し、死者 822 人、行方不明者 413 人、関連死 51 人の合計 1,286 人の犠牲者がでた。これは人口の８パーセントに達するものであり、自治体機能の著しい低下、生活基盤の喪失、地域コミュニティの分散、社会関係資本の喪失等々、町が消滅してしまったような大打撃を受けた。平地は町の面積の２パーセントに過ぎないが、そこに町の人口の８割の人々が住んでいたことも被害を大きくした要因であった。 この地震により、町内の小中学校７校のうち、５校がこの震災で使用できなくなり、新年度用の教科書をはじめとする教材もすべて使えなくなってしまい、学びの場を完全に喪失してしまった。卒業式間近の児童、生徒、父兄にはとても残念な思いをさせてしまったことと思う。 被害を大きくしてしまった要因は、外部からの強烈な刺激に対し「きっと大丈夫だろう」と思うことで落ち着こうとする「正常性バイアス」、自分以外に大勢の人がいるとき、周りに合わせてしまう「同調性バイアス」、経験していないものに対してなかなかリアリティを持つことができない、「経験バイアス」の３つである。津波の常襲地帯であり、地震と津波の恐ろしさをよく認識していながら、このような被害を招いてしまったのだ。 （２）避難所での問題点 津波による被害から家を失い、まさに命からがら逃げこんだ避難者がほとんどであった。避難所内を清潔に保つのが難しく、衛生環境の悪化や感染症発生の恐れが常にあった。さらには、身体が不自由な人や治療を要する疾病を抱えた人等、介護・介助が必要な人も一緒に滞在したため、細やかな対応も必要になり、運営は多難を極めた。避難所の生活は「共助」そのものである。その基本は相互理解であり、多様性の尊重である。少しのわがまま

	と少しの我慢が大事である。そして刻々と変わる状況に対応できるようにするため、考えられる備えをしておくことが大事である。備えて備え過ぎるということはない。学校や町内会（自治会）との連携や備蓄物資の確保、そして実効性のある避難訓練の実施を是非実行していただきたい。 （３）発災時の職員の動向 発災から翌日までは、目の前の助けを求める町民の救助、避難誘導が最優先され情報の収集・発信ができなかった。県その他の関係機関とも連絡が取れず、大槌町はまさに消滅したとの情報が飛び交っていたという。3 日目になってようやく県からの物資が入り始め、毛布やおにぎり、米などが届けられたが、十分な量には程遠かった。一方では、避難者の確定、移動、死亡届など対応する職員の負担が膨らみ始め、残された職員の業務は多忙を極めた。 大槌町は、3．11 震災津波の前年、平成 22 年に地域防災計画の全面見直しを行い、計画の修正、地震・津波対策アクションプログラムの作成、職員用防災手帳の作成、災害時要援護者支援計画の作成等を行った。その 1 年後の津波であった。平成 25 年に開かれた震災検証委員会の報告を見ると、防災計画の問題点として、以下 3 点に集約されると思う。是非参考にしていただき、適切な防災計画の策定と、住民の積極的な関与を図っていただきたい。 ① 総合性の欠如　各項目の相互補完と連続性の確保がされていない ② 実効性の欠如　計画が計画として機能しない ③ 参画性の欠如　計画策定に住民が関与していない
開催地より	東日本大震災を経験された語り部から、災害対策本部や本部員会議の運営についてや、避難所運営についてのお話を聞くことができ、災害に対するイメージを強く認識することができた。今日のお話しを、当町職員に共有するだけでなく、地域防災力の向上を図るため、地域の防災リーダーの育成にも役立てていきたいと思う。